



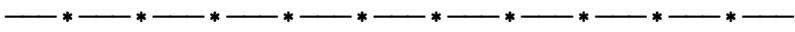
**Data**

監督：アグニェシュカ・ホランド  
 原作：ロバート・マーシャル『ソハの地下水道』（集英社文庫刊）  
 出演：ロベルト・ヴィエンツェヴ  
 イチ/ベンノ・フユルマン/  
 アグニェシュカ・グロホフスカ/ヘルバート・クナウプ/  
 マリア・シュラーダー/キンガ・ブライス/ミカエル・ルワウスキー

## 👁️👁️ みどころ

時代はナチス・ドイツが支配する1943年。舞台はポーランド。下水道のことを知り尽くす下水修理工ソハの前に、ゲッターの地面を掘って地下に降りてきたユダヤ人たちが……。これは当局に突き出すべき？それとも？

この手の映画は毎年多いが、実話を素材としたアカデミー賞外国語映画賞ノミネート作品はさすがに奥が深い。当初は欲得ずくであっても、人間には変化する能力が！人間の善意や良心を説得力を持って謳いあげた名作に、あなたもきっと心が洗われるはずだ。



## ■□■年に数回は、この手の映画を観なくては！■□■

日本では8月15日の終戦記念日に向けて「あの戦争」を考える映画がつくられることが少なくなったが、ドイツ、フランス、ポーランドでは「あの戦争」をテーマとした映画は多い。また、ナチス・ドイツの問題点やユダヤ人へのホロコーストを描いた名作は途切れない。そんな映画が大好きな私は、『シネマルーム27』では①『ペーパーバード 幸せは翼にのって』（10年）（114頁参照）、②『黄色い星の子供たち』（10年）（118頁参照）、③『ミケランジェロの暗号』（10年）（123頁参照）を、『シネマルーム28』では④『サラの鍵』（10年）（52頁参照）と⑤『善き人』（08年）（56頁参照）を、それ以降では⑥『屋根裏部屋のマリアたち』（10年）、⑦『あの日 あの時 愛の記憶』（11年）を評論している。

ナチス・ドイツによる迫害の中でユダヤ人をかくまった良心的なドイツ人、フランス人、ポーランド人たちの物語はこれまでさまざまに描かれたが、ポーランドの地下水道の中にユダヤ人たちを14カ月にわたってかくまったという実話があったとは何ともしごい。そ

れを実行したのはレオポルド・ソハというポーランド人だそうだが、ソハとは一体どんな人？『敬愛なるベートーヴェン』（06年）（『シネマルーム12』277頁参照）でユニークなベートーヴェンの姿（？）とその師弟愛を温かく紡ぎ出したポーランドの女性監督アグニェシュカ・ホランドによる本作は、グディニャポーランド劇映画祭で作品賞、監督賞、主演男優賞、主演女優賞等々を受賞した他、アカデミー賞外国語映画賞にもノミネートされているらしい。こんな名作は必見！そして、年に数回は、この手の映画を観なくちゃ・・・。

## ■□■マンホールの下には迷路の大世界が！■□■

日本の下水道整備は第2次世界大戦後だが、ペストの大流行に苦しんだ中世ヨーロッパでは14世紀のフランスに下水道ができた。また、19世紀にコレラが大流行したイギリスでも、ロンドンに下水道ができた。しかして本作を観れば、第2次世界大戦当時のポーランドでもマンホールの下に入れば、そこに広大な地下下水道の世界が広がっていることがよくわかる。



『ソハの地下下水道』  
©2011 Schmidt, Katze Filmkollektiv GmbH, Studio Filmowe ZEBRA, Hidden Films Inc.

上水道では水漏れを防止するため、水道管のさびや連結のチェックなどの定期点検が不可欠。下水が流れる地下下水道ではそれほどきめ細かなケアはいらないかもしれないが、それでも定期的な点検が不可欠だ。しかし、汚水が流れネズミが動き回っている地下下水道でそんな仕事に従事するのは誰だってイヤ。日本では公共下水道の管理は地方自治体の仕事だから「公務員」がそれをやっているはずだが、あの時代に下水修理工をやっていたポーランド人のレオポルド・ソハ（ロベルト・ヴィエンツキェヴィチ）はどんな身分の人？ソハは妻ヴァンダ・ソハ（キング・ブライス）と一人娘ステフチャと生活している男だが、映画冒頭に描かれるのは、若い相棒のシュチェペクと共に民家に侵入してコソ泥行為をし、そこでせしめた品物を地下下水道の中に隠すことに勤しんでいる姿。1943年当時ナチス・ドイツの支配下にあったポーランドのルヴフというまち（現在はウクライナのリヴィウ）にはユダヤ人ゲットーがあり、ユダヤ人はそこに隔離されていたが、ポーランド人はまだ安全。しかし、いくら家族の生活を守るためとはいえ、そんなことをして金を稼いでいるソハはろくな男じゃないはず。本作を鑑賞するについてはまず、私たちが未だかつて見たことのないソハの「職場」であるそんなマンホールの下にある迷路の大世界をタッパリと展望したい。

## ■□■どっちが得？最初はそんな計算から・・・■□■

ドイツ人実業家・オスカー・シンドラーや日本人外交官・杉原千畝はナチス・ドイツの迫害から精一杯ユダヤ人を守った英雄的人道主義者として後世にその名を残しているが、ポーランド人のソハもそれに並ぶ功績が讃えられているらしい。しかし、地下への脱出口

を掘ってゲッターから地下へ降りていたユダヤ人たちを発見したソハが、これをウクライナ将校のボルトニック（ミカエル・ルワウスキー）に通報せず、地下水道の隠れ家を提供する見返りとして1日あたり500ズロチの報酬を要求したのは、どっちが得かを考えた結果。そんな男が、なぜオスカー・シンドラーや杉原千敏と並ぶ英雄に？

本作はソハ自身も気づかない（はずの）、そんな人間の変化に焦点を当てたところがすばらしい。地下に降りてきたユダヤ人「ご一行」を見て、ソハが通報するのを思いとどまったのは、「教授」と呼ばれるイグナツィ・ヒゲル（ヘルバート・クナウブ）から口止め料としてスイス製の時計と金を提供されたためだし、1人500ズロチという数字も食料品提供等の「経費」を考えて割り出したものだから、さすがコソ泥稼業のソハは計算が高い。さらに隠れ家を提供できる人数を10～11名と絞り込んで、妥協しないところなどは、合理的といえば合理的、非人間的といえば非人間的だ。結局、ソハの世話になることになったのは、ヒゲルと妻パウリナ・ヒゲル（マリア・シュラーダー）、彼らの幼い子供クリシヤとパヴェウ、ソハを敵視するムンデク・マルグリエス（ベンノ・フユルマン）とムンデクが思いを寄せる若い女性クララ・ケラー（アグニエシュカ・グロホフスカ）、愛人関係にあるヤネクとハヤ等々11名だが、彼らの運命がいかにかに・・・。

## ■□■いつまでこんなことを？支援中止の決断は？■□■

本作は90%以上が地下水道の世界を描いているから、暗くて汚くそのうえいかにも臭そう。そんなスクリーンをじっと観ていると疲れてくるのが普通だが、実際は逆で、隅から隅まで知り尽くした地下水道を動き回るソハとその一角にかくまわれているユダヤ人たちの生活力のたくましさをから目を離すことができなくなる。

さらに、地下水道に逃げ込んだユダヤ人がいることは周知の事実だから、「発見するのは死体ばかりだ」と報告してもボルトニックたちが監視の目を光らせていく中、11名ものユダヤ人をかくまい続けるのが難しいのは当然。一度はシュチュエペクのちょっとした言葉から妻のヴァンダにそのことがバレてしまい、ソハはヴァンダからこっぴどく絞られたが、それに対してソハは・・・？また、ボルトニックがソハの家を訪れてきた時、ボルトニックに出そうとしたパンについて幼い一人娘が「それはユダヤ人の・・・」と口を滑らせたから大変。この事態をソハたちはいかに言い逃れを？さらにユダヤ人を捜すためにボルトニックから地下水道の道案内を命じられたソハは、一緒に目的地に向かったが、すぐ目の前に潜んでいる「ユダヤ人ご一行」をいかにしてごまかすの？女性監督アグニエシュカ・ホランドはこんなスリリングな状況を観客に手に汗握る緊張感をキープさせながら描いていく。

もっとも、その度に私たちは「ああ良かった」と胸をなで下ろすのだが、ヒゲルの金も尽き始めたうえ、彼らをかくまうことに極度に神経をすり減らしたソハは遂に「もう手を



『ソハの地下水道』  
©2011 Schmidt Katze Filmkollektiv GmbH, Studio Filmmagnum ZEPHA, Hidden Films Inc.

引くよ」と宣言。既にシュチェペクは手を引いていたし、ヒゲルから言われてお墓から掘り出した高価な宝石類もお駄賃代わりにもらうことをせず、きっちりヒゲルに返したから、これにて互いに貸し借りなし。ソハはハッキリそう割り切ったつもりだったが・・・。

## ■なぜ見限れないの？ソハの気持の変化に注目！■

「もう手を引くよ」と宣言し、何の貸し借りもないのだから、あのユダヤ人たちがどうなるうともはソハは無関係。つまり、木枯し紋次郎風にいえば、「あつしには関わりねえことござんす」状態だったはずだが、そんな中で大事件が発生！それはソハの支援が途切れた後、物資を求めべく地上に出てきたムンデクがドイツ兵に見つかり、射殺されそうになるところに出くわしたソハが、ムンデクを救うためとっさにドイツ兵を殺してしまったこと。ナチス・ドイツはその報復としてポーランド人10名を縛り首にしたが、その中には元相棒のシュチェペクもいたから大変。しかし、なぜソハはそんな状況に出くわす中、そんな行動を取ったの？

本作後半が描くソハの気持の変化は、消費増税法案の成立と衆議院解散の確約という政局に明け暮れ、騙し合いばかりやっているここ数日の政治情勢に見馴れた目には、心が洗われる感がある。その第1は、ソハが地下水道の中を迷い歩いている幼いクリシャとバヴェウを見つけた時の行動。その第2はハヤが愛人ヤネクの子を身ごもり、男の子を出産したことに対する行動。その第3はムンデクが愛するクララの妹マニヤを捜すため、ヤノブスカ強制収容所への潜入を手助けする行動だ。その詳細はあなた自身の目で確認してもらいたい。ソハのような欲得ずく人間(?)でも、その心の中にはこんな良き心がタップリと・・・。

## ■ハイライトは、豪雨の地下水道を舞台に！■

地球全体の気候が不安定になる中、今年の日本は7月11日～14日には九州北部豪雨が発生し、7月22日には和歌山南部や兵庫・淡路で記録的な大雨となった。しかして、今日ソハ一家は娘の聖体拝領の儀式に参加するため教会に訪れていたが、ポーランドのルヴフにも今日は豪雨が。こうなれば、地下水道には濁流となって大量の雨が流れ込むこと必至。すると、あの一角に押し込められているユダヤ人たちは？そう考えると、いてもたってもいられなくなったソハは、娘の大切な儀式もほどほどに濁流が流れる地下水道の中へ。他方、地下水道の一角にユダヤ人が潜んでいるとの確証を得たボルトニックも、再度ソハを案内役としてユダヤ人狩りに執念を燃やすことに・・・。

ヴィクトル・ユーゴー原作の『レ・ミゼラブル』のハイライトの1つはパリの地下水道の中でくり広げられるジャン・ヴァルジャンとジャヴェールとの追跡劇だが、本作のハイライトはそんな凄まじい洪水状態の地下水道の中でくり広げられる、三者三様の闘いだ。豪雨があがれば当然水は引くが、それまでユダヤ人たちは持ちこたえられるの？他方、洪水の中ボルトニックの命令で道案内をするソハは、いつまでボルトニックの命令に従うの？そんな本作のハイライトに見る人間模様は、しっかりあなた自身の目で。

2012(平成24)年8月13日記